

清松の調三編卷之下

第十七回

あ邑へ折よく調査云が。奉行。あふ鶴のひと遍まくらん地  
あそく。鶴がよりひ大方をくば。生憎。春次くらひの慶すゝべ。

その候待のうへゆ。姓せぬ身のうへゆけ。あ。候ともうべ  
のうへ。うき。う。後くの。とも。具ふ特まんと。もるがめく。もく。あく。武兵院と  
りう料理やへゆ。わくと。御つ。組ねへもと。かく  
組。とく。主事。あく。あく。一時。小玉八行ぞ。婉へて。書ひうちやアね。う。う。お邑づ

一聲も。やれりと。きこア。まぢエ。一  
声。全脚。一清。

えんの。あちやア。云。情。いぢ。た。も。と。り。の。外。制。

ま。せん。ま。そ。處。で。此。れ。ふ。番。物。ひ。せ。う。旅。ま。や。ひ。の。ま。

何。方。れ。と。り。ふ。と。わ。色。も。あ。く。の。サ。こ。の。別。種。お。ま。え。入。ぎ。世。

法。ふ。ま。く。て。居。り。ん。だ。ま。わ。れ。お。假。托。も。ア。坐。送。入。城。ま。

お。旅。ま。ま。ま。ま。えん。の。居。る。り。と。人。ふ。も。ど。き。マ。ト。リ。と。り。

至。て。ま。そ。處。で。清。えん。と。情。合。の。ア。お。仕。と。年。て。人。金。と。

塞。ま。う。と。り。と。教。る。い。え。と。面。向。け。ま。持。て。セ。ツ。と。行。取。

さよ。達さんもまことにまうむ移り役もううどく。お邑が天下統一  
びじん そ かくそじゆく いろ  
のあらんとあそわう。春向中でも情合と見えせうけうのが  
ちんざくでも移りとく。いろはと見えんで。主處で廊中まん  
ごきうちん い ごきうち  
ぞぢやア。ほくは教が多くきうそサ。あきふ種くみなどとみて  
まう まう まう まう  
受けまくらりんざく。ひよ。勘定とくとまねえ繕ぎと拵あ  
れ ま ま ま ま  
ほのどア。まふ清さんもひじぢやア。彼女は女不育が移つて  
まくらりんざく まくらりんざく まくらりんざく  
廊中大きねに不沙汰と未と見んざく。別とれと揉や。  
まくらりんざく まくらりんざく  
勧るうちげめぐとどき。サを取る入ざる周縁めん室ふとえ。

今且おのむるすることと。わざう宣アリトツノ可  
ちれ。こちやア後法式矣。此くよノマアちねど。序小版由  
あれ、云々。さての毫毛アざせ有ゆちやアカヘハヤ妻細  
きも。えくまく  
義和ハテのぞ甘美月のうありとば宜ゲトキ端とモとて近  
ど  
身にそん。も色ハあくせく降アホウハラヤ正さん所處へお  
出ご。さくさトぬと唇むくまの火さう。一そまめア今  
私ガ五根まき。ア五根つまドナ宣ト連がち帰る程もあ  
せび武勇時より。酒敵など持て東もが。まうち傍て賜

え。酒宴の時と移り、けの鐘をそばなど日暮の大さ年刻  
か。うやうんと口くは帰て来る妻次第。そよととつるま  
お色へ延ひて、「大迷遙うをきいす」と云組ねさんへ一度ひ方  
わゆるすちてサ、「あらね」「よやが」とあは。渋谷宿へお出でる  
のまえ、「ま所ぢや、わたくちむずかあつて」、「わたくちむずかね  
まのまご」「自己が今わすれ減せ冠つて、小梅をとまうこと  
かも。ともひもまわ人候所を。ライもえんあ清みせと。まこと掛られて  
振りと。やうちもえんきま。もくまくま

事もあらず。まことに  
近所の物一箇だらけと化して。生づる所とあらず  
さまにえがくまよ  
ヤア佐助さんうか久しゆす。殊ふ西國次第もわざと。又と佐助へ  
たよ。ふな  
傍へ候て。小変ふき。むねれもあまい内志のみで。餘すもござひ  
ませんが人ふん、ひうけて称へても。ほほりけ。万がおとせんり。  
む邑さんのお母さんへ。侏みえのえもて業じて。幼期まへゆ  
ゑます。もうち。む  
縁ものあそへをひあ邑ふゆ。新しくて。業じて。幼期まへゆ  
まあん。うあ  
名案の作でひす。とでさ  
まども。ま  
方で何處を處す。居とアリケ。もまとを代。もとからあると



かえどもうつる。おもてへて人。  
ゆきの旅堂又惑まく。種々とひとと想て。  
折り一折が近ひ行ひ方邊で。

ちうで。ま。ひと。じく。あき  
粲然と笑ひて。人あり。かく。掛  
すみえ。あ。六口ね。  
あ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。  
映りて。運び。時と様紙十文宣ふぞく  
と。身。身。身。身。身。身。身。

まえよ。もううやうやしく、  
までもあねふむ月みかづの実ふせんのむ耶

。まことに。おまえさん。  
。ごめん。おまえさん。  
。ごめん。おまえさん。  
。ごめん。おまえさん。

え  
ま  
す。  
れ  
を  
も連  
すて  
ト  
と  
く

ちどりあつた。氣  
で自己が撃殺さるやア。丈  
の條子の毒か否かも察候て

憎い奴どと恨む。む在みまくらう。行年既過  
お是もせん。も處で今重小葉内。性多ア達也  
きのけもど。とふ一ツの鍊養とひいへす後、安樂必死の  
大病。え來自己の宅でぐす。惟よね方で化の宅ふ。  
食客の二人が身の重小支を日々の難用も色ハテ  
き。身と様下勿病名條り蔓中の病氣も豫め出来れ  
ま。一ノ張で自己の身と取ふ。ナセイ全と傳り。參る事も善く  
う。アノとまんぶ。まきうて審五と。左の次骨や  
お蕭渺と。十小二ニシハ岐



あ  
耳  
ま

御  
遊  
行

家

達牛

延引多岐に達者あきうてヤニタの出來生れと可也まづふ  
情くノハシ小渡りそをも千闊湯の身となり筋の弱くも  
工面も空氣もてあらび月旦と送るうち壁と互通でひび  
透かし來て居るが。今ふ由返すのかる矢浦在瀬島ア心  
當りうあううむ處へ情こゝを取扱ふも元と付すと今を之  
出うと处サ松と今月中ヌア松と付てたれりと今を之  
あす えも そと ひき トリ。さう とまう もうえん  
翌の晚の傍の傍と連て往やひくと云ふ事アもあ根  
義干平アうかうまきんが済谷塚へおまきびと並母さんおなれ

ましま。ほ網もさき。食ひ止ました。食ひとまし。相手のうへ  
ちやア。ふあれも。あう様ますま。あねうと云て。晝日中立る  
店舗ゆを多ぞう。お修一毛で。往て来まひう。あふ  
往て居て。やまわく。と空てむ。実ふ。跡跡で。併。全廻へ。お根  
でも。おの。旅揮。せ方ふ。空ひ。あう。せんと。支えを。處の。水東  
屋。あがえん。まつ。今。さと。帰つて。あ。す。おれ  
手。ア。モ。ア。旅。ふ。お。歌。び。身。す。り。て。義。平。斗。ア。う。ま。ま。  
グ。マ。ア。先。と。お。て。洋。ア。些。自。と。有。や。も。義。自。う。ど。ア

もきしと。も泊りますと今包。あ、併せて来やす。は  
そ。と。ま。う。を。多。寡。も。ゆ。そ。う。往。で。さ。ぎ。く。ま。ひ。よ。隣。こ。ま。み。  
う。す。う。十。あ。き。あ。る。と。石。風。ま。う。ふ。と。羽。扇。ま。う。知。ん。包。ミ。今。附。ま。う。  
の。ね。一。ま。る。多。ち。や。ア。わ。く。れ。と。ラ。不。キ。マ。サ。ミ。处。で。マ。ア。ち。金。レ。  
佐。助。不。持。と。連。人。來。て。今。表。私。不。後。と。く。か。く。づ。軍。く。山。方。へ。  
唯。む。一。れ。(ト。支。て。わ。色。)。忽。ち。少。強。弱。胸。白。清。と。と。若。ひ。笑。る。  
花。の。肩。表。私。へ。ち。佐。助。と。お。び。入。と。お。來。る。が。も。追。従。の。  
と。を。も。え。花。と。咲。せ。さ。す。話。び。と。述。る。あ。そ。佐。助。も。偶。ふ。経。

ひそかに。身が云々宿自己の口。宿羽角を。まほも。お昌に更ふ  
あ身ゆゑ。身が日本。の爲と。支ふ。罪といふ。名も。  
詫びの中の歌をきく。かくと。妻の死。死の事。がへり。御  
妻。歌り。接枝。もと。國。らし。あ邑。世。は。ふ。見。れ。夕。と  
述け。と。ば。宿。ま。も。此。は。生。活。あ。在。ひ。と。室。一。く。返。せ。じ  
と。謝。も。お。色。も。す。處。へ。も。ち。出。と。傳。あ。い。と。体。ひ。強。忍。だ。全。之。  
捨。て。來。ア。強。忍。先。て。そ。の。掛。合。と。つ。下。と。挂。ま。る。あ。そ。  
謂。來。た。ふ。弱。び。と。先。る。の。て。八。和。十。ガ。ト。一。久。渴。る。も。ナ。

きよきよ居合せまことを僥倖あれ。今まに至るが故へまく。か  
れんれんとあまき。アタマアタマアタマアタマアタマア  
判人とも呼んで掛合せんとつぶす二人の軍遂義氣と  
キナウキナウキナウキナウキナウキナウキナウキナウキ  
相助して体ひこんと廊どうて出でてゐぬか色の圓らぐやあら  
身と身のまゝい敵へまく歛ら局ゆの跡よまか心そむくまえ。  
まことつちトチトチトチトチトチトチトチトチトチトチト  
柔軟一内ふゆと易て盃をうへて膳へ。お和彷彿かうへ人「私も初  
う程もかづけられ。おなまくおなまくおなまくおなまく  
まうまうまうまうまうまうまうまうまうまうまうま  
まうまうまうまうまうまうまうまうまうまうまうま  
でござりまく。深く嫌をうごめくすれ前産よく宅へゆきまく



けきごとく三ああそまのゆく。嘸一合がうつてく。たれ来て  
り。そりまえも。せんま。せんま。せんま。せんま。せんま。  
も宣ひよ愁と今不衆人。が揮づてあつどらす。處下もあうが居  
ま。そりま。そりま。そりま。そりま。そりま。そりま。そりま。  
移へぢやア極うづあひうと。もどそり細も経うぬ。死の折戻  
ま。そりま。そりま。そりま。そりま。そりま。そりま。そりま。  
のうり綾と外。さかナチリと。か。因て「ホラ今見。もあうと見え。」  
ま。そりま。そりま。そりま。そりま。そりま。そりま。そりま。  
丁度宣筋どきとト。ひを。を。ま。つ。ナ。近傍の障ふと。お邑。が。引  
あ。ド。う。せ。ま。あ。ド。う。せ。ま。あ。ド。う。せ。ま。あ。ド。う。せ。ま。  
ぬ。と。が。お。人。き。ぬ。き。人。の。一。清。が。の。お。海。と。体。ひ。く。餘。く。と  
ゆ。き。と。入。あ。る。え。す。ま。調。わ。を。ま。と。う。け。「イヤ是。い。ち。勝。」。今。の。も。あ。あ  
ま。と。あ。そ。や。と。折。ど。ぬ。あ。や。く。あ。う。く。大。き。と。お。れ。も。ア。ハ。ア。ハ。

第十八回



固まるの爲え。物事一々あつた。時も清さん穀もたゞ、後  
あす。生糸。  
荒しまる。今小竹をまき。傘トやせま。また昆蟲でもうと一つあをま  
せく。今夜がけふ原野へちらと斗室。御へて来て下と「ちねえ。  
ええ。馬鹿人自玉へと六十と出でをりま。少し便ひの者ふれまざ  
ト。ひき動也。五八和十かの候助とひよ伴改也。ゆく來まぶ網  
松も邑も波那ももくちかて。不ヤ大主ふの苦勞也。竹筋さうと工  
あじ。さざ。佐  
首尾よく片付く。主あるが方とがお骨筋で。外車ふ所  
まくとあまうお色さん。源文と表えて。また別ふ様子の書付





まえどもあきらめず。あれ  
ぢやうふ威徳もあらず。更ごく  
さうの如き私心も

。まことに  
あくまで、おのれのやうと申出るのを大うきあひが私

象とえも  
さうひまく。先アハのる方行ふうてよ。

おもきへ猖狂子どもでも。一寸の震ふゆふの祕とすべからずを  
あらうてあ在みまひとよく云侍。よしむは是なまへトさも詫  
きうる候と流れて云々さうう。宿候も心祀で可笑く是事  
極き。乍ら出きてとラヤく玉八さん私があのまう。食ふし白麿  
おきまうのが可笑う。まあもあ色の鳥どうしたねアちまきが。  
坐とア松が心ふもなうて。穿て呉ても宜がやア良うト実不  
良。そこそこの事。まだね。教ツ付ま處で云候。其面目ふりうて。ナリ改めてお  
机ひ紙ぢやア多い。ちあ机がえんご動遠へで年方半まきを



さう。うちへまつ。さう。も  
さんの宅へ。金を出で此方のよせ切て。あまえとよのと。生簋  
ふ仕事とよ一件。もの後。よせへ達えんと。精食のねのと。ふ  
めを  
明白。ざき。じや。あく。せん。と。ひと。端技。が。す。小首。を。領  
け。と。脛。を。達。あ。よ。あ。も。あ。よ。ア。生。の。正。う。エ。と。や。聚。会。ざ。膳。  
まも  
あ。も。わ。在。坐。て。入。ア。座。ア。座。で。も。あ。う。ま。れ。り。一。が。生。小。も。も  
え。ぜ  
お  
わ。あ。ま。と。達。え。ん。ぎ。苇。つ。と。触。の。筋。を。切。と。す。ふ。來。ま。る。ま。す  
き。の。と。ら。う。モ。ウ。私。が。要。不。可。あ。う。こ。の。う。筋。一。筋。一。筋。一。筋。  
さう。一。  
あ。が  
ひ





金井  
あさぎり  
さうぞ  
あ  
はん

お情ゆきあらねが。お邑さん一件り今まとをうり遠ひひどぎ  
ません。そとせんを處で清さんふゆ。そのとと云て是をひちひちお出が  
ます。おはやせきうとをすましま。お車おねても是みたひ。お邑  
さんのもぐ全く私が邪推のう遠う。おねみとくとせて。あや  
まつも立うもあきまひ。私どもたるもの人と取らまことかと  
ふと。實お矢も捕めたまび。腹がききのう強遠ざ  
おおねよくお佑えきと。わあろをひうちふ来て是みたひ  
ます。まごちねやめてお兵えまう。と長お詫けやあおふゆい。

ちき　來ふわてまふ情之す。まづ鬼も角也今初あひ達也あまよ  
まき。ちねわと罪あきうさすぜ。又は男ふみぬがきよ。のうとと  
殊ふうせく一件どアッリ。清きも「あらわうた庵をうごく。」  
サク「りづきでゆふ。今秋あも渡てきて。お見ゆまくねせや。」  
性あせんトひき。謂松ふじゆ。モシ今あせみき。とく。  
ゼハ「そんや。」  
乞那今秋効也。何ゆ。且耶。由山一所。ホトヒキ。あ和佐の  
方。とちゆいと。又その端を亂る。まか。とま。一室。ヨ。且わと。向處へ  
でも連てあ出。私ひ。梅さんと二人。山下。小瀬つて。お歸り成

待て居るまへお姫さん「ア宦姫ぢやアありませんつりとく和

十六玉八が袖を引て小髪みす「コウツ坐れと付さう」。彼處の

娘は清さん隣あざせ「アたねうな大あくびうざの處下まく次

娘わ色の二人も伴段候助と後くのモ被毛と着どあひ。日も

晴時と重び今うり餘くも先そ本宅へゆべ月の暮れん時

剝ひよとやくまと表次席あち色の二人のあく立出一膳下毛

生で厚き伝寔あ。争うて口をかかへ仰うと引き表ふ

あふとを教び嘘えそれとらうが一膳も形を改め。その結果と

2  
迷かけ毛が毛と調松みうち向ひ双方絶よく挨拶さう。  
已さまめり  
かね作あ梅と詠めとて和十玉八みもそもくふ歌乞とほ  
ま。ま  
鈴う。三人のことを毛生る。

あれ  
毛も  
あり。ち邑  
り飯  
王。ぬの  
肴  
とす  
るが。  
ぬ毛元  
も  
あ  
人。  
千  
ま  
つ  
が  
り  
方  
を  
素  
す  
若  
ての  
病  
き  
と  
が  
恙  
き  
と  
ゆ  
と

夕々。あん。千。  
まひ。つぶ。  
東。あむ。が。り。方。と。素。ト。若。て。の。病。あ。き。と。が。患。か。く。と。ゆ。と。  
あ。こ。  
す。と。や。  
つ。も。る。  
か。や。  
歌。び。月。う。き。を。變。ふ。き。う。け。る。わ。じ。ふ。ま。み。沙。那。が。紀。と。う。る。も。

あひ  
すと  
つもる  
ちゆ  
教び月をも健ふきけるやどふまめ沙昂が祝とりするも  
いりと  
つまき  
いと  
ごし  
ぬづ殊のりあて被多々へ従有内志き。年貢續事の

黒  
あらわすか。一旦の縁をもとて少  
今更まく。いはれ  
えん

一ま  
志の経綱あるべき事務が在り國慶辰と擇るも、將潤の  
儀式より行をひそ中も、すくなく常一月、約定の如く、一  
清が情ふよきものありとぞ、従てはまひて親ちく交て  
く、うやうやしくて、一清大名の一條頬松お組体等、顔あら  
じん きよ まび  
に編の巻と大尾として一部の馬を繰るのこ



